

## ＜研究ノート＞

# タイ北部の高僧クルーバー・シーウィチャイの生涯 ——ランナー文化圏における宗教実践の考察に向けて——

泉 経 武

タイ北部の高僧クルーバー・シーウィチャイ (Khruba-Siwichai 1878–1938) に関して、従来の研究では主に以下の2点に関心が向けられてきた。

第1に、1934年から35年にかけてクルーバー・シーウィチャイが中心になって行われたドーイステープ寺院に至る参道建築である。チェンマイ西方の山上にあるこの寺院に至る約11キロメートルの参道を、政府援助を受けずに、県内と近県から自発的に集まった信徒とともに僅か約5カ月で完成させた。第2に、1910年代から20年代にクルーバー・シーウィチャイが示したとみなされているサンガ統治法への不服従についてである。シャム（現タイ王国）が近代化を図る過程で、北部への地方統治を浸透させるために、バンコクのサンガ局が定めた「サンガ統治法」（1902年制定）を北部に施行したが、クルーバー・シーウィチャイはそれに従わなかった。それにより彼は幾度も軟禁され、後にはバンコクにまで呼び出され審問を受けている。

これらの彼の行動は、シャムの近代化の過程でバンコクの中央権権を画する支配権力とそれに抗する地方<sup>(1)</sup>との関係を政治的局面において論じられてはきたものの、クルーバー・シーウィチャイがランナー王国において民心を集めることを可能にした宗教的・文化的背景に関しては十分な検討がされてこなかった。彼の生涯に関するタイ語文献の多くは、森林域で瞑想止観に徹する一仏教僧侶として生きることが、彼の生涯の基軸であったことを示している。しかし、19世紀後半から20世紀初頭にかけてのシャムとランナーの社会変動の波頭に、彼が民衆の精神的指導者として立脚した事実は、彼の生

涯にランナーの宗教文化が果たした役割の考察を不可欠にさせている。本稿では、近年のタイにおけるクルーバー・シーウィチャイに関する研究成果を踏まえ、より詳細な彼の生涯の記述を主眼とし、その上で、当時のランナーの歴史と宗教実践の舞台にクルーバー・シーウィチャイを押し上げたランナーの宗教文化を明確にしていく今後の課題を考察していきたい<sup>(2)</sup>。

## 1. クルーバー・シーウィチャイの生涯

クルーバー・シーウィチャイ（クルーバーはランナー語で尊師を意味するが、以下ではシーウィチャイ比丘と記す）は、1878年6月11日現在のランプーン県リー郡バーンパーング村に生まれる。両親は農業に従事。幼少名はファーン、5人兄弟の末っ子であった。温和な性格で生き物を愛し、静かに物事を考え込む性格であった。出家以前から食事は菜食で、出家後も生涯菜食を貫いた<sup>(3)</sup>。

18歳の時、出身村内のバーンパーング寺院に見習い僧として入る。21歳の時、ホーングルアン寺院（ランプーン）のクルーバー・サマナのもとで比丘として出家し、僧名シリウィチャヨーを与えられる。ただし、当時の村人からはシーウィチャイと称され、その呼称が今日まで一般に用いられている。この頃から、彼はクルーバー・カッティヤから呪術・呪文（wetmon-khatha）をはじめランナーの慣習を学び、不死身になると信じられていた刺青を両足に入れる。23歳の時、当時精神修養の道場として著名であったドーイテー寺院に行き、呪術や呪文のほかに止観の行法をクルーバー・ウパラ（クルーバー・サマナの師僧）のもとで学ぶ。この頃シーウィチャイ比丘は、周囲から持戒の僧とみなされ篤い信仰心を集めていた。翌年（1901）バーンパーング寺院の住職の死去により、24歳でシーウィチャイ比丘は同寺院の住職に就く<sup>(4)</sup>。

住職就任後、真摯な修行を続ける彼を慕い多くの信徒が寺院に集うようになるが、シーウィチャイ比丘はその喧噪が修行に不適だとして山地森林域に寺院を設ける（サリードーンチャイサーイムーンルアン寺院。しかし村人の

一部はこの寺院も“バーンパーング寺院”と称する)<sup>(5)</sup>また、シーウィチャイ比丘は布薩堂監督僧 (caw-muat-ubosot) として地域の寺院と僧侶の統括を担う一僧侶となる<sup>(6)</sup>。

その後、周辺の山地で遊行を始める。山地森林で遭遇した山岳少数民族が彼の仏教実践に感化され、その多くが仏教に入信した。シーウィチャイ比丘は、タイ山地民に仏教の布教をした最初の僧侶である。シーウィチャイ比丘の評判は山地から山麓の農村部、さらには都市部にも拡まり、僧侶としてあるいは見習い僧として彼の弟子になることを懇願するものが彼のもとを多く訪れるようになる。

1902年シャムのラーマ5世（在位1868-1910）治世下で初めての「サンガ統治法（ラッタナーコーシン歴121年サンガ統治法）」が制定される。近代改革事業を推進していたラーマ5世は、仏教サンガのもつ潜在的資源の活用を考え、異母弟ワチラヤーン親王にサンガの組織整備を任せ、国民国家形成のための教育普及を目指したサンガ統治法を完成させる。

ランナー王国は、1558年から1774年まで約200年にわたりビルマ支配を受けていた。ビルマからの独立を計っていたランナー王国は、自力での独立を果たせず、トンブリ朝タクシン王（在位1767-1782）とチャオプラヤー・チャクリ（後のラッタナーコーシン朝初代国王ラーマ1世（在位1782-1809））からの軍支援を受けビルマ軍を駆逐した。しかし、独立後のランナー王国はシャムの属国となり、ラーマ5世時にはシャムの一州（Monthon Lao-chang）となる。ゆえに、近代化の過程で中央集権化を計るシャムにとって地方の一州であるランナーにおいても、サンガ統治法は施行された。

この「サンガ統治法」では、授戒師 (upacha) の資格がない僧侶が出家志願者を僧侶もしくは見習い僧にさせることを禁じていた。多くの出家志願者がシーウィチャイ比丘のもとに集っていた。「布薩堂監督僧」であった彼は、履行された「サンガ統治法」のもとでは従来のように得度式を遂行できないことを理解し制度上の変更を受け入れたのであろう、ランナーの地方サンガ行政を通じて授戒師の資格申請をする。ところが、1年以上にわたり待った

が許可されなかった。時は入安居期を迎え、彼はサンガ公認の授戒師の資格がないまま出家志願の見習い僧を僧侶にさせた。この行動により、シーウィチャイ比丘はサンガ行政地区長と役人である行政地区長に捕縛され、一晚リールアング寺院で軟禁された<sup>(7)</sup>。

解放後、サンガ行政管区地区長は、シーウィチャイ比丘と彼の弟子にランナー王国で施行されるサンガ統治法に関する会合への出席を促す通達をするが、シーウィチャイ比丘と彼の弟子たちは集合しなかった。227の律 (vinaya) でさえ完全な遵守は不可能であるのに、そのうえ世俗法 (サンガ統治法) を守ることは困難であるとシーウィチャイ比丘は判断し、会合に出席しなかった。彼の弟子らも師僧の意向に沿った。その結果、シーウィチャイ比丘はドーンチャイ寺院 (ランプーン) に23日間軟禁される。解放後、再び同会合の通達が届くが、彼は再度欠席する。今度は、プラタート・ドーイジェーング寺院 (ランプーン) に約1年間軟禁される。解放後、バーンパーング寺院住職と布薩堂監督僧の任を解任させられる<sup>(8)</sup>。その後しばらくして、サンガ行政管区地区長は監督する寺院に依拠する僧侶の数を調べることをシーウィチャイ比丘に通達するが、彼は既に住職でもなく布薩堂監督僧の任にもない自分の仕事でないと無視する<sup>(9)</sup>。

1910年、ラーマ6世戴冠式の祝典を各寺院で行うよう連絡が届く。寺院の門を飾り、蟬燭や堤燈で慶祝するように指示された。しかし、ランナーの慣習ではそうした慶祝が実施されたことがなく、シーウィチャイ比丘は儀式の準備ができなかった。そのうえ、バーンパーング寺院は人里離れた山上にあり、祝典を施行しても誰かが関心を持つわけではないとシーウィチャイ比丘は考え、ラーマ6世への祝辞を述べるだけにとどめた。後にこのことを知ったサンガ行政管区地区長が、ランプーンの役人に「シーウィチャイ比丘は非常に頑固だ。他の僧侶や村人にサヤーム政府の役人の指示に従わず、抵抗するようけしかけている」と伝える。サンガ行政管区地区長は、シーウィチャイ比丘をバーンパーング寺院から追放し、周辺寺院に彼の受け入れを拒否するよう通達した。この頃、彼の母親はシーウィチャイ比丘に還俗を勧め

ている。しかし、彼は「死ぬまで僧侶でいたい」と還俗する意思のないことを伝えている。

1920年、祝典儀礼不実施に対する処罰に抗議するために、シーウィチャイ比丘とその弟子一団はランプーンのサンガ行政管長を訪れる。その際、300人以上の僧侶と数百人の見習い僧がシーウィチャイ比丘に付き従った。シーウィチャイ比丘と数人の見習い僧だけがプラタート・ハリブンチャイ寺院（ランプーン）の中でサンガ行政管長と面談をし、信徒は寺院の周囲を取り囲み様子をうかがった。直に、彼に対して布施をする人が周辺から大勢集まり、寺院周辺が騒然となった。さらに、シーウィチャイ比丘と彼に従う一団がランプーン中心部に入る際には、役人・警察官によって阻止された。反乱にまで発展することを恐れた役人・警察官は、刃物を所持する村人からそれらを没収した。結局シーウィチャイ比丘は捕まり寺院に一晩軟禁される。しかし、寺院側ではこの民衆の結集状態が尋常ではないと危惧し、その日のうちにシーウィチャイ比丘をチェンマイに送り出している。

シーウィチャイ比丘は、チェンマイに送られた後にもチェートワン寺院からシードンチャイ寺院に移動させられ、約3カ月軟禁された。シードンチャイ寺院には、彼に布施をする村人が途切れなく訪れた。シードンチャイ寺院住職は、この寺院に彼を訪ねに来たものに対して、名前を記録し反乱の意思をもつ輩として役所に届けると告げたが、訪れる村人や山岳少数民族は減少せず増えるばかりであった。同年、軟禁からの解放後、事実調査のためにシーウィチャイ比丘はバンコクに護送される。

同年5月20日、シーウィチャイ比丘はベンチャマボピット寺院（バンコク）に到着する<sup>(10)</sup>。今回のシーウィチャイ比丘の件に関する事実調査委員会委員長のプラウオーラウオントゥー・グロムムーンチンナウオンシリワット比丘、同委員ヤーナワラーポン比丘、同委員タンマトゥライローガージャーン比丘の3人が、ベンチャマボピット寺院でまずシーウィチャイ比丘に審問を行った。そして、7月12日にプラウオーラウオントゥー・グロムムーンチンナウオンシリワット比丘は、当時サンカラージャ（サンガ長）で

あったワチラヤーン親王（在位1910-1921）に対して、「審問の結果、シーウィチャイ比丘に誤りがない」旨の手紙を出している。7月14日ワチラヤーン親王は、ベンチャマボピット寺院でシーウィチャイ比丘に直接会い、以下の8条の質問をした。①授戒師の資格なく出家式を施行、②ランプーン（リー郡）のサンガ行政官長の指示への無視、③会合への欠席、④ラーマ6世即位の典礼（戴冠式）の祝賀式典の不実施、⑤注意警告への不服従、⑥寺院の僧侶・見習い僧の数の調査の不実施、⑦会合欠席を他の僧侶に指示、⑧呪術・呪文を使用し人々を欺いた<sup>(11)</sup>。審問終了後、同日ワチラヤーン親王はプラウオーラウオントゥー・グロムムーンチンナウオンシリワット比丘に、「シーウィチャイ比丘に誤りがないことを確認した。帰郷を許可する」旨の手紙を出している。それを受けて、プラウオーラウオントゥー・グロムムーンチンナウオンシリワット比丘は、プラクルー・パラットサンピパットプロムジャリヤージャーン比丘（今回のシーウィチャイ比丘に対する審問の件にどういった関係で関わったのかは不明）に対して、「サンカラージャと、プラウオーラウオントゥー・グロムムーンチンナウオンシリワット比丘と、事実調査委員会委員は、シーウィチャイ比丘に対して審問をおこない、彼に誤りがないことを確認した。サンカラージャは、彼が「仏教に関する知識が非常に少なく、ヴィナヤ（律）に関しても波羅夷法（布施・持戒・出家・般若・精進・忍辱・真実・発願・慈悲・喜捨）しか知らない。また、サンガに関する知識もない。簡単な読経のほか、パーワナー（礼拝文“タワイ・ポン・プラ”）しか知らない。しかし、とても真剣な僧侶で、サマナ・サンヤー（暗記力にすぐれた僧）であり、修行者としての心がけを持ち、厳しく修行を積んでいる僧侶である<sup>(12)</sup>。」との内容を当時の新聞「バンコク・タイム」（当紙は、シーウィチャイ比丘がバンコクに護送された後、ランナーの高僧であるシーウィチャイ比丘がサンガ行政に就く僧侶らから非難され告訴を受けていることを記事として掲載した（6月27日）。その記事の中で、シーウィチャイ比丘がランナーで民衆から尊敬され篤い信仰の対象であり、事実調査委員会委員による正確で詳細な調査・審問の実施を期す内容を書き載せ

ている。)に掲載することを命じている。7月24日、プラクルー・パラットサンピパットプロムジャリヤージャーン比丘は「バンコク・タイム」に対して記事掲載の依頼の手紙を書いている。その後、「バンコク・タイム」に記事が掲載されたのかは不明である。

いずれにせよ、審問の結果ワチラヤーン親王（サンカラージャ）はシーウィチャイ比丘の無罪を認める。親王はシーウィチャイ比丘に対して、バンコクに留まってもランプーンに戻っても良いと許可しているが、彼はランプーンに戻る<sup>(13)</sup>。そして、帰郷後、幾度となく自身を告訴したランプーンのサンガ行政管長などサンガ行政に就く僧侶らに対して、シーウィチャイ比丘は布施をしている<sup>(14)</sup>。

ランプーンに戻った後のシーウィチャイ比丘は、寺院の修復活動に従事していく。以前から彼は「(ランナーの) 聖者 tonbun (haeng Lanna)」とみなされてきたが、寺院の修復活動を始めてからは、さらに「聖者」としての扱いを周囲から受けるようになる<sup>(15)</sup>。ランナー王国最後の王ケーオナワラット(在位1911-1939)とプララートチャチャーヤージャオ・ダーラーラッサミー(ラーマ5世王妃)が、チェンマイのシン寺院の仏殿の修復をシーウィチャイ比丘に依頼している<sup>(16)</sup>。その後、彼は100軒以上の寺院の修復・改築を行った。

また、生年干支仏塔信仰(chuthat)はすでにランナーの仏教信仰の一形態として存在したが、1924年シーウィチャイ比丘が自分の生年干支の仏塔(プレー県プラチャートチョーヘー寺院)を参拝したことによって、ランナー仏教文化圏一帯にこの生年干支仏塔信仰が定着していった<sup>(17)</sup>。

1926年から28年にかけて、シーウィチャイ比丘は弟子とともに諸寺院に散乱していたランナー版三蔵經の収集と補修を行った。破損した貝葉は新しく鉄筆で書き改め修復した<sup>(18)</sup>。

1934年から35年にかけて、シーウィチャイ比丘はチェンマイ西方の山上に位置し仏舍利を安置するドーイステープ寺院までの約11キロの参道建設を開始する。工事開始の鍬入れは、ケーオナワラット王が行った<sup>(19)</sup>。公的

援助、つまりシャム政府やランナーの王族からの援助を一切受けずに、チェンマイやチェンマイ近隣に在住する信徒によって工事は行われ、僅か約5カ月で完成させた<sup>(20)</sup>。これによって、山上入口まで車で行けるようになった。この工事開始にあたって、シーウィチャイ比丘はサンガ行政に就く僧侶から「参道建設のために木々を伐採し森林を破壊した」「許可もなく見習い僧を出家させた」「多くの寺院で僧侶らにサンガからの離脱を持ち掛けた」などの理由で告訴され、参道工事の途中で彼は再度バンコクに行き審問を受けている<sup>(21)</sup>。

参道の完成後シーウィチャイ比丘は体調を崩し、1938年2月21日死去する<sup>(22)</sup>。

## 2. 今後の課題

1774年ビルマ支配からの解放後のランナー王国とシャムとの関係を捉えなければならない。ランナー王国がシャムの属国になったことによって、ランナーの民衆の生活はどのように変化したのか<sup>(23)</sup>。ランナー王国のシャム化を目的にバンコクから派遣されたタンマユット派の仏教僧侶が施行したサンガ統治法が、当時のランナーの仏教界に及ぼした影響は如何なるものであったのか<sup>(24)</sup>。

また、ランナー王国建国から約半世紀後のクーナー王在位期（1335-1385）にスリランカ系の上座仏教がランナーに流伝している。しかし、この仏教の到来は、ランナー文化圏全域に均質な仏教独自の信仰形態が即座に形成され定着したことを意味しない。上座仏教到来後も、山岳少数民族の信仰世界は山地の精霊を対象にしていたと推測されるが、森林域でのシーウィチャイ比丘の宗教実践が、さほど時間を要せず、多くの少数民族を仏教信仰に改心させ、生活形態がまったく変容する出家にまで彼らを向かわせたのはなぜか。シーウィチャイ比丘が山地森林域で修行生活を開始させた頃には、仏教と近似する、あるいは仏教との共鳴を容易にする信仰世界をもつ少数民族が既に存在していたのであろうか。もしそうであるとするならば、シーウィチャイ



比丘はそうした少数民族を選択し彼らに接近したのであろうか。

さらには、シーウィチャイ比丘と、当時のランナー王国で顕著な形態をとる仏教信仰との関係の考察が必要であろう。シーウィチャイ比丘の活動以前からランナー王国とその周辺域でみられた生年干支仏塔信仰 (chuthat) と、仏足跡崇拜信仰 (khathi-phraphutthabat) はその考察対象として挙げられる。現在のタイ北部においても確認されるこれら2つの信仰形態の歴史的変遷を考察する上でも、シーウィチャイ比丘の活動や宗教実践との関わりを無視することはできない。

その他にも、シーウィチャイ比丘が出家当初に学んだ呪術・呪文 (wetmon-khatha) をその後用いなかったのはなぜか<sup>(25)</sup>。彼が多くの見習い僧を出家させたのは、当時多くの廃寺があったことと関連しているのか<sup>(26)</sup>。当時18あったといわれる仏教の“派 (nikai)”の存在は、シーウィチャイ比丘の仏教実践に影響力を持ったのか<sup>(27)</sup>。仏教寺院修復活動が、ランナーの民衆にとって、シーウィチャイ比丘を「ランナーの聖者」とみなす決定要因となったのはなぜか<sup>(28)</sup>。こうした、シーウィチャイ比丘の生涯にミクロな考察視点を注ぐことで、領土としてのランナーを超えた文化域としてのランナーが研究視野に浮上し、さらにはシャムが進めた近代化が仏教をめぐりランナーとシャムとの域間でいかなる政治的かつ文化的緊張関係を生じさせていたのかがより鮮明になると思われる。

これらの課題は、シーウィチャイ比丘の生涯の行動にすべて有機的に関連した事柄であったに違いない。上記の問題群の解明が、当時のランナー王国の置かれた歴史的状況のもとにシーウィチャイ比丘の仏教実践が多様な側面を見せながら展開したことを明示していくものと確信している。

\* 本稿は2006年度前田基金研究助成によるものである。前田恵學先生はじめ、関係された先生方に深く感謝いたします。また、タイにおいては、Nopphadon Siriwatthano 比丘 (プラプッタバート・タモ寺院住職)、Phatthanakon Kittipanno 比丘 (バーンパーング寺院住職)、W. Wachilamethi 比丘 (ベンチャマボピット寺院)、

Somchot Ongsakun 先生（チェンマイ大学）、Saratsawadi Ongsakun 先生（チェンマイ大学）、Sawaeng Malasaen 先生（ユパラート専門学校・チェンマイ）、Kwanchewan Buadaeng 先生（チェンマイ大学）が長時間のインタビューに応じていただき、多くのご教示を賜っている。特に Somchot Ongsakun 先生と Saratsawadi Ongsakun 先生からは、資料に関するご指導と収集に多大なるご協力を賜った。これらの比丘と先生方のご厚意とご理解がなければ、今回の研究調査はかたちをなさなかったと思われる。心よりお礼を申し上げます。

## 注

- (1) ここでいう地方とは、今日のタイ北部山間盆地を中心とした政治的統合体で、1296年にチェンマイを都に定め、1939年までその王権を保持したランナー王国をさす。[飯島2001] ランナー王国は、クーナー王（在位1335-85）の時代にスリランカ系の上座仏教が広まり、王はスコータイから仏教僧侶を招き文化交流がなされた。ティローカラート王（在位1441-87）は第八次結集を成功させている。1558年から1774年の間ビルマ支配下にあったが、その間も多種のビルマ仏教文化を受容している。
- (2) これまでクルーパー・シーウィチャイの生涯に関して、タイ人（歴史）研究者はソーパーの研究 [Sopha] に依拠してきた。本稿では、特に注を設けない限り全て Fai Wicai Lanna Sathabanwicaisangkhom Mahawitthayalai Chiangmai (2nd edition) に依っている。
- (3) Samnaksonsoemsinlapawatthanatham Mahawitthayalai Chiangmai, p. 18
- (4) Witthaya, p. 21
- (5) Sopha, p. 36
- (6) 「寺院監督僧 cawhua-muat-wat」ともいう。ランナーにおける旧慣に則った僧侶集団における統治組織のなかで、授戒師（upacha ——（得度式の場合において）僧侶比丘に囲まれた中で、出家志願者に対する責任を有する僧侶。（志願者の出家後は）僧侶集団への指南役であり、かつ監督者でもあり、彼の行動の適不適を判断し、出家後の教育と修行に対して責任をもつ。[Phra-thepwethi, p. 432]）として選ばれた僧侶を「布薩堂監督僧（caw-muat-ubosot）」と称した。すでに授戒師である僧侶から選ばれる。10～30軒の寺院の監督の任に就く。布薩堂監督僧は布薩堂のある寺院に常住し、得度式は布薩堂監督僧のいる寺院1箇所で行われる。たとえ僧侶集団において公的地位にない布薩堂監督僧でも、地域住民をまとめ厚く信仰され、周辺域に住する僧侶らと布薩堂監督僧は強固な師弟関係を築いていた。[Sopha, p. 48, Sisak Wanliphodon and Walailak Songsiri, p. 197]

- (7) Sopha, pp. 79–80
- (8) *ibid.*, pp. 80–83
- (9) Carat, p. 41 Mahamakutratchawithayalai Witthayakhet Lanna, p. 164 Witthaya, p. 44
- (10) Sopha, pp. 81–85 Thianchay, p. 90 Witthaya, pp. 83–117
- (11) Carat, p. 45 Mahamakutratchawithayalai Witthayakhet Lanna, pp. 165–66 Sopha, pp. 81–82 Witthaya, p. 47
- (12) Carat, pp. 82–83 Witthaya, pp. 89–90
- (13) Carat, pp. 81–84 Witthaya, pp. 87–90
- (14) 記録は「布施」をした事実のみを記す。ランブーンで役職に就く僧侶らに対するシーウィチャイ比丘の謝罪の意であったと考えられる。
- (15) Mahamakutratchawithayalai Witthayakhet Lanna, p. 173 Sopha, p. 64
- (16) Carat, p. 93 Witthaya, p. 105
- (17) 生年の干支ごとに定まっている仏塔を信奉するランナーにおける仏塔信仰のこと。自分の干支の仏塔への参拝は功德を得て長寿になると信じられ、また死後の魂は自分の干支の仏塔に戻り宿るとされている。この仏塔信仰の発祥に関しては不明。[Thianchai, pp. 90–91, Wilailak, pp. 40–41] 信仰対象としての仏塔は、ランナーに7基、ビルマに2基、ナコンパトム（タイ東北部）に1基ある。その他に、チェンマイの仏像1体とインド・ブッダガヤの菩提樹がそれぞれ信仰対象となり、各々が干支の12支に相当する。
1. 子年—チェンマイ県・ジョームトーング仏塔
  2. 丑年—ランパーン県・ランパーンルアング仏塔
  3. 寅年—プレー県・チョーヘー仏塔
  4. 卯年—プレー県・チェーヘン仏塔
  5. 辰年—チェンマイ県・プラプッタシヒング仏像（プラシング寺院）
  6. 巳年—インド・ブッダガヤの菩提樹
  7. 午年—ビルマ・シュエダゴン仏塔
  8. 未年—チェンマイ県・ドーイステープ仏塔
  9. 申年—ナコンパノム県・パノム仏塔
  10. 酉年—ランブーン県・ハリブンチャイ仏塔
  11. 戌年—ビルマ・インクエン仏塔
- （あるいは、天界にあるとされるゲートゲオチュラーマニー仏塔（ブッダの頭髮を納めていると信じられている））
12. 亥年—チェンライ県・ドーイトウン仏塔
- [Mani, pp. 101–103, Sopha, p. 40, Wilailak, p. 13]
- (18) 貝葉の修復が行われた記載はあるが、三蔵の文面そのものに対して何からの修正

がなされたのかに関しては不明。[Carat, p. 99 Witthaya, p. 107]

- (19) Carat, p. 107 Samnaksonsoemsinlapawatthanatham Mahawitthayalai Chiangmai, p. 18  
Witthaya, p. 113
- (20) Carat, pp. 104–112 Mahamakutratchawithayalai Witthayakhet Lanna, p. 175  
Samnaksonsoemsinlapawatthanatham Mahawitthayalai Chiangmai, p. 18  
Sopha, p. 83 Witthaya, pp. 113–14
- (21) Carat, pp. 113–119 Sopha, pp. 83–85 Witthaya, pp. 114–17
- (22) 死因は痔。Carat, pp. 136–43  
Mahamakutratchawithayalai Witthayakhet Lanna, p. 178  
Sopha, p. 85 Wilak, p. 20 Witthaya, pp. 121–23, p. 127
- (23) Anan, Latdawan, Saratsawadii, Sisak Wanliphodon and Walailak Songsiri, Sopha
- (24) Kriansak, Michel, Phra-Phaisan, Sopha
- (25) Anan, Anu, Sigeharu, Sisak Wanliphodon and Walailak Songsiri, Sopha
- (26) Anu, Sopha
- (27) Sisak Wanliphodon and Walailak Songsiri, Wilak, Somchot, Sopha
- (28) Anu, Sopha

## 参考文献

飯島明子

- 2001 「タイ人の世紀」再考——初期ランナー史上の諸問題」『岩波講座東南アジア史 2』岩波書店、pp. 257–286

Anan Kancanaphan

- 1984 *Phatthanakan khong chiwit lae watthanatham Lanna* (『ランナーの生活と文化の変遷』). Chiangmai, Khrongkan tamra mahawitthayalai.

Anu Noenhat

- n.d. *Phipuya Phrasong Pucan Pa-iaw lae Sappareo (Sangkhom muang Chiangmai lem 7)* (『祖霊、仏教僧侶、善男子、森林墓地と葬祭夫 (チェンマイ社会第7巻)』). n.p.

Carat khosananan

- 2006 *Phra-Khrubacaw-Siwichai Ariyasong haeng Lanna* (『クルーバー・シーウィチャイ：ランナーの聖者』). Bangkok, Fuangfa.

Fai Wicai Lanna Sathabanwicaisangkhom Mahawitthayalai Chiangmai (2nd edition)

- 1997 *Tamnan Khruba-Siwichai baep phitsadan lae tamnan wat-suandok (ekkasana wicha kan ruamsomphot 700pi Chiangmai an dap thi 4 phim khrang thi 2)* (『詳細なク

ルーバー・シーウィチャイの歴史とスアンドーク寺院の歴史』). Chiangmai, Sathabanwicaisangkhom Mahawitthayalai Chiangmai.

Kriangsak Chetwatthanawanit

2003 “So kansadaeng kantosu lae tuaton khong chawban Chiangmai (「胡弓、表現、衝突そしてチェンマイの村人のセルフ」)”. In *Cawmae khunpu changsaw changfon* (『女神、祖父霊、胡弓演奏者、舞踊女』) by Paritta Chareomphao Koanatakun (edited). Bangkok, Sunmanutwithtaya-Sirinthon.

Latdawan Saesaiaw

2002 *200 pi phama nai Lanna* (『ランナーにおけるビルマの200年』). Bangkok, Khrongkan anaboriwensuksa 5 phumiphak sunmanutwithtaya-Sirinthon.

Mahamakutratchawithayalai Witthayakhet Lanna

2004 *Khrongkan Pariwatphrakhamphi Lanna* (『ランナーの仏典編纂プロジェクト』). Chiangmai, Mahamakutratchawithayalai Witthayakhet Lanna.

Mani Phayomyong

1990 *Prappheni 12 duan Lanna-thai* (second edition) (『ランナー・タイの12か月の慣習』). Chiangmai, So. kanphim.

Michel Mormaen (Prasoet Phanthachat transl.)

1970 *Wat banping sunklang sangkhom muban thai lu*. (「バーンピン寺院：タイ・ルー族村落社会の中心」) *nay Sangkhom lae Watthanatham Lanna Thai*. Chiangmai, Khanasangkhomsat Mahawitthayalai Chiangmai.

Phra-Phaisan Wisalo

2003 *Phutthasatsana thai nay anakhot: naewnom lae thang ook cak wikrit* (『未来のタイ仏教：方向性と危機からの出口』). Bangkok, Mulanithi-sotsisaritwong.

Phra-Thepwethi (Prayut Payutto)

1993 *Photcananukrom Phutthasat chabap pramuan sap* (6th edition) (『仏教辞典 語彙集』). Bangkok, Rongphim Mahaculalongkon-ratchawitthayalai.

Samnaksongsoemsinlapawatthanatham Mahawitthayalai Chiangmai

1999 *Ruang law caw khun pho* (『ポー比丘の語る話』). Bangkok, Mathichon.

Saratsawadii Ongsakun

2008 *Prawatsat Lanna (revised and enlarged edition)* (『ランナーの歴史 (改訂増補版)』). Bangkok, Arunamarin.

Sigeharu Tanabe

2004 (2nd) *Nung luang nung dam: tamnan khong phu nam chawna haeng lanna thai* (『黄衣・黒衣：タイ・ランナーの農民指導者の歴史』). Bangkok, Samnakphim haeng Chulalongkon Mahawitthayalai.

Sisak Wanliphodon and Walailak Songsiri

2008 *Nakhon Phrae cak adit ma patcuban phumniwet watthanatham rabop khwam chua lae prawatsat thongthin* (『過去から現在までのプレー都：信仰の文化生態と地方史』). Bangkok, Mulanithi lek-Praphai Wiriaphan.

Somchot Ongsakun

2000 Nung satawat haeng kan tosu phua “amnat thong thin” khong “phak prachachon”. nai *Suksasatsan* (ruam lem pi thi 22–27) chabap thi 1 Makarakhom-Mithunayon.

Sopha Chanamun

1991 “*Khruba-Siwichay “tonbun” haeng Lanna (1878–1918)* (「ランナーの聖者クルーバー・シーウィチャイ」)”. MA thesis, Thammasat University.

Thianchai Aksondit

2002 *Lanna: cakkrawan tuaton amnat* (『ランナー：世界観、自身、権力』). Bangkok, Khrongkan-Anaboriwensuksa.

Witthaya Prathumthararat

1998 *Khruba-Siwichay: tam roy tonbun haeng Lanna* (『クルーバー・シーウィチャイ：ランナーの聖者の足跡』). Bangkok, Chatkaew.

Wilak Sipasang

2001 *Tonbun Lanna: Prawat Khruba chabap anmuan* (『ランナーの聖者：クルーバーの歴史』). Chiangmai, Honghian-supsanphumphanya-Lanna.

Wilailak Yangrot

2004 *Wai Phrathatcedi tam pikoet* (『生年干支仏塔の礼拝』). Bangkok, Samnakphim-miusiamphret.